ネブタ流えろ マメの葉とつぱれ

清野 耕司
（県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹）

今年もネブタ・ネブタの季節が巡ってきた。今回は、近世中期以降に灯籠祭りとして発達した都市祭礼、ネブタの起源について、村落の眠り流し行事との関連を紹介したい。もちろん、眠り流しだけでなく七夕や盆行事、日本海側を主とした灯籠型の山車を用いる祭礼など広く検討しなければ、青森県のネブタの故事来歴を解明することは難しい。

「子ムタ祭之図」
（『奥民図彙』比良野貞彦、天明8年（1788）、国立公文書館内閣文庫蔵）

そもそも、眠り流しとは七夕の早朝に睡魔を払うとして、水浴をしたり、形代（かたしろ＝災いを移す身代わりの人形）を模型船や笹竹などに乗せて川や海へ流したりする行事である。柳田国男の「眠流し考」（『定本柳田国男集 第十三巻』所収、初出は『信州随筆』昭和11年）によると、埼玉県熊谷地方のネム流しでは旧暦7月7日の未明に青年男女が川辺に集まり、合歓木（ネムノキ）と大豆の葉を川に投げ込み「ネムは流れよ、まめの葉はとまれ」と唱え、川を泳いで帰るのが習わしであった。また、栃木県内でもネブト流し、ネムタ流しなどといい、紙で作った人形を流したという。

柳田は「眠流し考」で、主に関東以北の眠り流し行事を全国の類似する行事と比較しながら七夕や盆行事も含め広く見渡し、青森県のネブタもその中に位置付けている。つまり、ネブタが江戸時代の中期以降、華やかで技巧的な大灯籠を中心に、練り歩く町場の祭礼として発展したことは特異であるとしながらも、ネブタを眠り流しの一つの変化形と見ているのである。そして、眠り流しは、害悪としての睡魔を払うもので、その睡魔をもたらす御霊（ごりょう＝霊魂の尊称だが、特に現世に恨みを残し災厄の原因になると考えられた霊）を送る儀礼であろうと述べている。

青森県のネブタの古記録に目を転じると、弘前藩庁日記（弘前市立図書館蔵）の享保5年（1720）7月6日の条に、5代藩主、津軽信寿が「眠流を高覧遊ばされ候」とある。この「眠流」をネブタと考えるならば、これが最古の記録である。2年後の享保7年にも信寿は町内単位で練り歩く「祢（ね）むた流」を見学している。同じころ、ネブタに灯籠が付随していたという記録もあるが、画期的に詳細が知れるのは、天明8年（1788）江戸詰の津軽藩士、比良野貞彦が帰国してつづった『奥民図彙（おうみんずい）』の中の「子（ネ）ムタ祭ノ図」である。解説文に「祢ぶたハながれろ。まめの葉ハとどまれ。いやいやいやよ」と囃すとある。津軽では、この言葉を今でも記憶している古老がいる。「ねぶたこァ流えろ、豆の葉っことっつぱれ、ヤレヤレヤレヤ」などである。

ネブタは、意外に近い時代まで、「ネブタ（睡魔）を流してマメ（壮健）をとどめる」という眠り流しの趣旨とも言える囃し言葉を残しつつも、灯籠の意匠や規模を発達させ、今日に至っているとも言えよう。